

日本オーステイン協会第12回大会プログラム

- 日時:2018(平成30)年6月30日(土) 受付:10:30より
- 場所:大妻女子大学千代田キャンパス F332 教室 (F棟 3階)
(東京都千代田区三番町12番地)
※JR総武線「市ヶ谷」駅から徒歩10分。東京メトロ半蔵門線「半蔵門駅」より徒歩5分。東京メトロ東西線「九段下」駅より徒歩15分。
※大学ホームページ(<https://www.otsuma.ac.jp/access/chiyoda>)参照のこと。各駅からのアクセス地図も掲載。
- 参加費: 日本オーステイン協会会員:無料
当日会員(上記会員以外):一般1,000円、学生500円(当日受付で支払い)

- ◆開会の辞(10:55~11:00) 塩谷清人(日本オーステイン協会会長)
- ◆研究発表(11:00~12:20) 司会:坂本武(関西大学名誉教授)
研究発表1 [11:00~11:40(質疑応答10分を含む)]
発表者: 廣田美玲(獨協医科大学助教)
「メアリ・ロビンソンのファッション戦略と女性の権利」
研究発表2 [11:40~12:20(質疑応答10分を含む)]
発表者: 島崎はつよ(サウサンプトン大学大学院修了、Ph. D.)
「バーニー、オーステイン、保養地サウサンプトン1780-1796:
十八世紀消費文化とロマン派的視点から」
- ◆昼食(12:20~13:30)
- ◆総会(13:30~13:50)
- ◆シンポジウム(14:00~16:15)
テーマ:「〈始まり〉としての *Northanger Abbey*」
司会・講師: 中川僚子(聖心女子大学教授)
講師: 土井良子(白百合女子大学准教授)
講師: 小川公代(上智大学准教授)
講師: 秦邦生(青山学院大学准教授)
- ◆特別講演(16:30~17:40)
講師: 阿部公彦(東京大学教授)
タイトル: 近代小説の「のぞき」と「不機嫌」:
ジェイン・オーステイン『高慢と偏見』を中心に
司会: 原田範行(東京女子大学教授)
- ◆閉会の辞(17:40~17:45)
- ◆懇親会(18:00~20:00)
場所: F棟2階 コタカフェ
会費: 5,000円

問合せ先: 日本オーステイン協会事務局
〒790-8578 松山市文京町4-2 松山大学新井研究室内
E-mail: harai@g.matsuyama-u.ac.jp

日本オーステイン協会第12回大会発表レジュメ

【研究発表梗概】

メアリ・ロビンソンのファッション戦略と女性の権利

廣田 美玲（獨協医科大学助教）

イギリスにおいて18世紀末から、メアリ・ウルストンクラフトなどのフェミニストが台頭し始め、女性の権利を主張するが、財産継承権など男性優位の法律が施行する中、一般には女性が自らの意志や意見を明瞭にすることは困難であったと考えるのが妥当であろう。

本発表では、メアリ・ロビンソン(1758-1800)が、実生活において、また彼女の文学作品において、いかにファッションという消費文化を、女性が自己表現や自己主張する装置として戦略的に用いたか、ということを読み解くことを目的としている。

ロビンソンは十代で結婚し、娘を出産した後は、夫の借金から債務者監獄での生活を余儀なくされる。しかし、その美貌からデイヴィッド・ギャリックから目をかけられるようになり、女優としてデビューすると、英国随一の美女という評判が広まるほどの美人女優になった。当時の皇太子（後の国王ジョージ四世）は、舞台上の彼女を見初め、自分の愛人にした。

ロビンソン自身が執筆した『メアリ・ロビンソンの回想録』（以下『回想録』）や、ポーラ・バーンのロビンソンの伝記『パーディタ — メアリ・ロビンソンの生涯』（以下『パーディタ』）を読み進めると、ファッションに関する記述の多さに気付く。例えば『回想録』には、当時の上流階級の社交場のひとつであったラネラを訪れた時の彼女のファッションについて次のような記述がある。“I wore a gown of light brown lustring with close round cuff (it was then the fashion to wear long ruffles); my hair was without powder, and my head adorned with a plain cap and a white chip hat, without any ornaments whatever”（『回想録』52）と他者との差別化を図ったシンプルな装いのロビンソンに“all eyes were fixed upon me”と人々の関心が集まる。また、夫に連れられてパンテオン・コンサートに行った際には、“at this place it was customary to much dressed; large loops and high feathers were universally worn”（『回想録』52）と書かれおり、場所によって巧みに着こなしを変えて、自分の魅力をアピールしていることが窺える。また、どの機会にどのような装いをしていたかという詳細な記述からも彼女のファッションへの強いこだわりが感じられる。

また『パーディタ』によると、ロビンソンは、盛装もすれば、男装もし、シンプルな装いもできることでも有名であった。またファッション界における最大の名誉は、例えば“Robinson vest”や“Robinson hat”というように新しいデザインのドレスや帽子に自分の名前がつけられることであった。彼女は、自らが流行を作り、他の人々が熱心に彼女の後を追った（『パーディタ』

193-4)。こうして、彼女は、貴族ではない女性にはまれなことではあるが、当時のファッション・アイコンとして名を馳せるようになった。ロビンソンは、女優や皇太子の愛人といった社交界での成り上がり者であり、このような社会的地位の低さも彼女のファッション戦略と密接に関連していると解釈できよう。

さらにロビンソンはメアリ・ウルストンクラフトとも交流があり、ロビンソン自身もフェミニストとしての著作『イギリスの女性たちへの手紙』(1799年)もある。ウルストンクラフトが『女性の権利の擁護』(1792年)でウィリアム・ブラックストンが規定した相続の準則に強い異議を唱えたことに対し、ロビンソンは自らの小説『ウォルシンガム』(1797年)で、ゴシック小説の枠組みを用いて、異装をさせて女性に財産継承をさせる。当作品に登場するサー・シドニーは女性であるにもかかわらず、男性として育てられる。これは、ジェンダーの違いにより、受け取るべく財産に差異が生じることが起因している。サー・シドニーの父、つまり、莫大な財産を持つオーブリー家の家長は、妻が妊娠中に遺書を作成し、生まれてくる子どもが男子か女子かによって財産継承の内容を変更している。息子が誕生した場合のみ、すべての財産が継承されることになっており、娘の場合は、それとは比較にならないほど少ない財産しか継承できない。ロビンソンは異装というテクニックを使い、女性に財産継承をさせようという、彼女のフェミニストとしての一面が窺える場面であり、ファッションがジェンダーやセクシュアリティと密接に関連している例を示している。

The Lady's Magazine、*La Belle assemblée*、*Le Beau Monde* や *The Lady's monthly museum* といった当時の女性誌に掲載されたファッションに関する記事やファッション・プレートなどを参照しつつ、ロビンソンやロビンソンが作り出したフィクション上の女性たちにとって、ファッションはどのような意味を持っていたのか、どのような機能を果たす装置として捉えられていたのか、ということをも明らかにしていきたい。

バーニー、オースティン、保養地サウサンプトン1780-1796：

十八世紀消費文化とロマン派的視点から

島崎 はつよ (サウサンプトン大学大学院修了、Ph. D.)

ジェイン・オースティンは、晩年を過ごしたチョートン村に移住する直前の1806年から1809年を、同じハンプシャー州にある港街サウサンプトンで過ごした。農場が点在する静かな田園地帯にあるチョートン村に比べて、サウサンプトンは当時、バースやタンブリッジ・ウェルズなどの大規模な保養地に並ぶ、様々な社交場を備えた流行の温泉街であり、新たに海水浴場としての人気も高まりつつあった。英皇太子フレデリックや十八世紀を代表する詩人ウィリアム・クーパーなども、度々休暇を過

ごしたことが知られている。オースティン自身も長期滞在の前にサウサンプトンを訪れている。最初の滞在は8歳の時（1783）で、ミセス・コーリーの経営する寄宿学校で姉カサンドラと共に学び、18歳の誕生日（1793）を旧市街の中心地にあるドルフィン・ホテルで祝い、舞踏を楽しんだ。

オースティンの長編作品には、サウサンプトンに関する直接的言及はないが、鉱泉や海水浴場を備えた社交場としての都市という点において、*Northanger Abbey*や*Persuasion*におけるバースでの描写や、未完の小説*Sanditon*における投機事業にまつわる物語が、サウサンプトン訪問者たちの社交様式を彷彿とさせる。いずれも都市と田園における生活様式の差異に焦点が当てられ、登場人物が消費文化のただ中に身を置くことで、道徳的な価値観を忘れることの危険性が示唆される。成熟した作家オースティンの消費文化に関する批判的な視点は、14歳の時に著した習作、*Love and Freindship* [sic] (1790) に、すでに垣間見られる。老境に差し掛かる主人公Lauraから、親友Isobelの娘Marianneに宛てた手紙では、18歳当時に交わしたIsobelとの会話を引用し、以下の助言を与えている。

‘[...] Beware of the insipid Vanities and idle Dissipations of the Metropolis of England; Beware of the unmeaning Luxuries of Bath and of the stinking fish of Southampton.’

(*Love and Freindship*, Letter 4)

首都ロンドンの人々の虚栄・消費、バースを訪れる人々の豪奢、そしてサウサンプトンの「鼻につく魚の匂い」に警鐘が鳴らされる。大都市への一般的な言及に対し、後者への港街ならでの具体的な描写に、若きオースティン自身の経験に基づく諧謔精神が表れていると言えよう。

ここで、オースティンより少し前にサウサンプトンを訪れた、フランセス・バーニーの視点についても考えたい。バーニーは小説、*Camilla* (1796) において、この地を天然鉱水と海水浴場、舞踏場、劇場を備えた流行の保養地として、詳細に描写している。近隣の「古きイングランド」を象徴する森林地帯出身で、純真な主人公Camillaが、社交場に集う貴族階級・紳士階級の人々の生活様式に感化され、衣装代を浪費したり、大陸帰りの従兄Clermontがワインや牡蠣など身分不相応の豪華な食事を好んだりするなど、消費文化への辛らつな諷刺が読み取られる。

バーニーは、作品執筆前の1780年と1789年にサウサンプトンを訪れている。最初の訪問では、友人のヘスター・スレールと共に滞在していたバースでのカトリック襲撃に端を発した全国的な暴動（the Gordon Riots）を逃れ、サウサンプトンへやってきた。父親チャールズ・バーニーへの手紙には、

Every thing here is perfectly tranquil,—& we procured a Morning Post of yesterday that assures us of the restored tranquility of London,—we are therefore now Travelling merely for pleasure. . . (June 13, 1780)

と、記す。「大都市」に比べて、サウサンプトンには静穏があり、切迫した危険のために高ぶった神経を落ち着かせることができた。また、バーニーは街の中心地にある舞踏場へも足を運び、この街が十分に発達して心地よいことを指摘する。

その後、小説家として成功したバーニーは、ジョージ三世の妃、シャーロット王妃の直属の侍女として召し抱えられ、1789年、王室の休暇に伴ってサウサンプトンを訪れる。日記には以下のように記した。

It is a pretty clean town, and the views from the Southampton water are highly *picturesque*: but all this I had seen to far greater advantage, with Mr. and Mrs. and Miss Thrale.

(June 30, 1789. My emphasis.)

均整の取れた海岸線などの景観の美しさを描写するにあたり、ウィリアム・ギルピンが1782年に提唱した‘picturesque’という用語を引用していることは、注目に値する。サウサンプトンを単なる社交場のみならず、新たに勃興しつつあるロマン派的な概念から街を観察している。さらに、バーニーの描写は、王室御用邸の周辺牧草地で働く農民にも及び、貴族階級の豪華に対する彼らの清貧を賞賛するなど、前者への批判的姿勢が一目瞭然となる。

史実に基づいて、サウサンプトンを訪れたバーニーとオースティンの経験と描写とを比較することで、両作家の視点が重なり合うと確認できる。特に、前者のサウサンプトンに対する直接的な言及が、書簡、個人的な日記、そして小説と、時を経るごとに辛辣な諷刺へと変容していく様から、保養地としてのサウサンプトンの開発は1790年代初め、歴史的記録から判別し得る以上に急速に行われたのではないか。後に滞在したオースティンの視点からも、この街の発展は、しばしば大都市ロンドンに住む人々の精神的退廃に描かれるように、滞在する人々の道徳性低下も招いたのだと推測できる。お気に入りの小説*Camilla*におけるサウサンプトンの生活様式の詳細な描写からも、オースティンが自身の滞在経験と照らし合わせて作品を読んだことは、想像に難くない。バーニーの自然に対するロマン派的視点と、都市における消費文化への批判は、例えば、*Mansfield Park*における、自然を愛するファニー・プライスと、都会・富を愛するメアリー・クロフォードなどのオースティンの人物造形にも、間接的に影響を与えているのだと言えよう。

【シンポジウム】

〈始まり〉としての *Northanger Abbey*

司会・講師 中川 僚子 (聖心女子大学教授)
講師 土井 良子 (白百合女子大学准教授)
講師 小川 公代 (上智大学准教授)
講師 秦 邦生 (青山学院大学准教授)

出版 200 年の節目を記念して、〈始まり〉としての *Northanger Abbey* の意義と可能性について改めて考察したい。オースティンの長編第一作として *Northanger Abbey* は現代に向けて何を語るか。作家人生の出発、オースティンが目指した新しい小説の開始、後続の作家にとっての起点としてのオースティンといった、現代の視点からの様々な〈始まり〉について、フロアとともに考えてみたい。

“But history, real solemn history, I cannot be interested in.” :

歴史を読む／書くジェイン・オースティン

土井 良子

キャサリンのこの率直な感想から始まるティルニー兄妹との会話 (*NA*, I, 14) は、ジェイン・オースティンの歴史 (書) 観を探るうえで議論の的となってきた。本発表では、10 代半ばのオースティンが書いたとされるゴールドスミス の歴史書への傍注、‘The History of England’ (1791)、‘Catharine, or the Bower’ (1792) などを援用しつつ、オースティンの歴史書・歴史記述に対する意識を探る。さらに、それが小説家としての姿勢にどうつながっていったのか考えてみたい。

20 世紀心理学理論からみた『ノーサンガー・アビー』の革新性

小川 公代

ヒロインの歪曲された自己欺瞞、あるいは錯誤ともいえる視点から語られるオースティンのリアリズム的手法が「革新的」と目されるようになったのは、ジョイス、ウルフらの実験的小説の先駆けとして評価されるようになってからであろう。たとえば、同時代批評家 (Edward Mangin) は『ノーサンガー・アビー』に見られるヒロインの空想世界に耽溺する傾向を厳しく批判した。夏目漱石がオースティンのリアリズムの技法を賞賛したことは周知の事実であるが、その理由がウィリアム・ジェイムズらの 20 世紀心理学理論に依拠していることはあまり知られていない。本発表では、オースティンの「意識」の捉え方に注目しながら、その語りの革新性を再評価したい。

「今」読み返すジェイン・オースティン

秦 邦 生

20世紀には殺伐とした世相からの「避難所」として Jane Austen が愛好される傾向が見られたが、それを批判した D. W. Harding の有名な論考 “Regulated Hatred” (1940) が発表されたのもまた、第二次世界大戦中だった。物語からある読者が受ける印象や影響は、彼女／彼自身が生きる「今」の感覚によってどの程度まで左右されるのか。Northanger Abbey の同一場面への言及を共有する Harding の論考と Ian McEwan の Atonement (2001) を中心に、この問題を考えてみたい。

「なんて美しいヒヤシンス！」— 環境文学として読む『ノーサンガー・アビー』

中 川 僚 子

“What beautiful hyacinths!—I have just learnt to love a hyacinth.”—ノーサンガー・アビーに着いて最初の朝、キャサリンはヒヤシンスの美しさをこう賛嘆する。“natural”—“unnatural”という対義語を用いて語られるヒロインの成長と栽培種ヒヤシンスはどのように内在的に関与しているのか。「記号的消費」（ボードリヤール）を体現するティルニー将軍を囲む「モノ」の氾濫と対比することで、環境文学としての読解を試みたい。

【特別講演】

近代小説の「のぞき」と「不機嫌」：

ジェーン・オースティン『高慢と偏見』を中心に

阿 部 公 彦

近代小説には「のぞき」や「盗み聞き」があふれている。その大きな機能は、プロットを前に進めるということだった。しかし、それだけではない。西洋近代社会の成立過程でプライバシーや個人主義への意識が高まり、人々が「内面」に注意を向けるようになると、「のぞき」や「盗み聞き」もより深い意味を持つようになる。

本講演では、ジェーン・オースティン『高慢と偏見』などいくつかの作品の「のぞき」や「盗み聞き」の意味や機能について考えた上で、それらが小説ジャンルの構造とどうかわっているかについて考察する。そこでは「不機嫌」という心理もまた重要な意味を持つことが明らかになるだろう。